
他世界への介入者

地獄の傀儡師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他世界への介入者

【Nコード】

N24220

【作者名】

地獄の傀儡師

【あらすじ】

青年は世界を呪い否定された世界にただ一人いた。

だがある人物の違う世界に行かないかと言う言葉を聞いた青年はそれを了承し違う世界に向かう。

介入者となった彼に世界はどう反応するのだろうか？

ガンダムなどロボット物の夢小説です。

あまり面白いか自信はありませんがよかった楽しんで読んでください。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

プロローグ

青年は世界を呪った

自分の存在を否定した世界を

青年「この世は俺を否定する。俺は何処に行けば普通の人間として見てくれるんだ」

青年は闇を操れる特別な力があつた

それは先祖代々受け継がれる力

青年は助けられないと思われた人達をその力を使って救った

だが結果は周りから気味悪がれ助けた人にさへ自分を否定された

何がいけなかった？何故人を助けたのに自分が気味悪がれなきゃいけない？

助けずに見捨てればよかったのか？助けなければよかったのか？

青年「俺はこの世には必要ない存在のようだな」

何をしてても結局感謝されるのではなく、周りから人が消えていくだけ

青年「そろそろ時間だな」

だが青年には一つだけ楽しみがあった

青年「再放送でもやっぱりガンダムは飽きないな」

そうガンダムなどのロボット物を見ている時だけ、時間を忘れることが出来るのだ

青年「俺もガンダムなどの世界に行ってみたいな」

この世界に俺の居場所はない。なら違う世界に行っても問題ないだろ

青年「まあそんなトリップや転生する話何てありえないな」

青年がそう思った時

？「行きたいんなら行かせてあげるよ」

青年「誰だ？」

誰かの声が聞こえ振り返るが誰もいない

？「貴方は行きたいの？」

青年「何処にだ？」

？「ガンダムなどの世界に」

青年「行けるものなら行きたいな」

？「本当にいいの？いない間誰も心配しないの？」

青年「両親は既に他界していない。だから問題ない」

？「じゃあ案内するよ」

その声が聞こえた後俺は意識を失った

これは青年が力を得て他世界に介入する物語の最初のいちまくである

プロローグ（後書き）

次回自身の力と機体入手それと一緒に平行世界に行く仲間を選びます。

ちなみに台詞の前に名前を書くのは、自分が誰の台詞なのかが分からなくなってしまうからです。

それでも読んでくれるのなら次回から宜しくお願いします。

能力と機体と仲間入手（前書き）

題名の通りです。

駄文ですが宜しく願います。

能力と機体と仲間入手

青年「此所は？」

目が覚めたら全く知らない空間にいた

？「目が覚めた？」

声が聞こえ振り向くと其所には一人の女の子が立っていた

青年「君が俺を呼んだのか？」

？「うんそうだよ。じゃあ目が覚めたなら早速貴方に能力と仲間を与えるね」

青年「ああ頼む」

？「能力はとりあえずニュータイプ SEED 純粹種イノベータ
ーでいい？」

青年「ああそれだけあれば十分だな」

？「仲間だけどパイロット4人と艦長を一人決めていいよ」

青年「じゃあ逆シャアのアムロ・レイ　OOセカンドの刹那　Wエ
ンドレスワルツのヒロ・ユイとゼクス・マーキス　艦長はブライ
ト・ノアさんで」

？「了解。戦艦はどうする？」

ここは普通ラーカイルムと言うところだが

青年「あえてマクロス・クォーターで」

一回やってみたかったんだよな

？「了解。それじゃあ早速行ってもらうけど」

青年「ちょっと待て俺の機体は何なんだ？」

女の子の言葉を遮り聞いた

？「機体は貴方が作ったプラモデルの中で気に入っている物の中から、私が適当に選ぶからそれに乗ってもらおうよ」

青年「気に入っている物なら大丈夫だな」

初代のザク何かが搭乗機ではさすがに弱すぎるからな

？「後選んだプラモデルが改造してあったら改造した通りの機体に乗ることになるから」

改造した通りなら俺は色々武器持たせたりしてるから武装が豊富そうだな

？「それじゃあ行く前に注意事項を言っておくね」

青年「注意事項？」

？「まず選んだ仲間の機体は最初是最強機体の二つ前だから、まあ後々ストーリーが進むにつれて最強機体は出るよ多分」

青年「今最強機体はその内出るの後多分って言わなかった？」

？「き気のせいだよ。えっと次は機体性能と大きさは向かった世界に合わせるから」

この条件は恐らく強すぎたら困る為そうするのかな？

？「次は最初はどの陣営にも属してはいけない」

青年「最初は中立を貫き、終盤は中立か何処かの陣営に行くかは任せると言うことか？」

？「そういうこと。次は向かった世界の話が完結したら強制的に此所に戻ってもらうから。ああ後また次の世界に行く時仲間と戦艦を代えることが出来るから、ちなみに君の機体も勿論代えるからね」

青年「分かった」

？「最後に他世界に向かったらその世界の死すべき運命の人を必ず一人救うこと」

青年「救えなかったら？」

？「そしたら貴方は元の世界に強制的に戻ってもらうよ」

青年「ああ了解した」

？「それじゃあこれから向かってもらうけど他に何か欲しい能力と
がある？」

既にS E E Dとかもらっているのにまだ何か頼んでもいいのかよ

青年「じゃあボソソジャンプ出来るようにしてくれ」

？「それだけでいいの？」

いや逆にまだいいのかよ

青年「じゃあ俺の闇の力を機体も使えるようにしてくれ」

？「了解。他には？」

おいおいまだ何か能力くれるのかよ

青年「後は刃が黒い日本刀を機体と俺にくれ」

？「分かったよ」

青年「とりあえずそれだけで」

？「了解。ああそう言えば貴方の名前は？」

青年「名前言う必要があるのか？」

？「うん一応ね」

名前かそんな物すぐに捨てたから無いんだが

青年「俺の名はカイト カイト・トウサカだ」

ちょっとパイロット風に言ってみた

？「カイトさんかいいい名前だね」

適当に考えた名前何だかな

カイト「君の名前は？」

？「私はレンといいます」

カイト「いきなりで申し訳ないが彼女になってくれ」

レン「え！そそんないきなり／＼／」

カイト「ふっ冗談だよ」

レン「カイトさんの馬鹿。ヒロインと好きなだけ関係もてるようにしてあげようと思ったのに」

カイト「え！マジで？」

レン「今の発言でやめました。ヒロインはカイトさんが最初に軟派した女の子にしましたから」

カイト「何！それでは他世界で軟派が出来ない」

あれちょっと待て俺ってこんなキャラだっけ？

カイト「ごほん、えっともう行けるのか？」

レン「行けますよ」

レンがそういうと一つの扉が出現した

カイト「それじゃあ行くとしますか」

レン「何か分からないことがあったら私を心の中で呼んでくださいね」

カイト「ああ了解した」

レン「それではお気をつけて」

レンが扉を開き俺はその中に入った

こうして力を手に入れた彼の物語が始まる

果たして世界は彼をどう見るのだろうか？

能力と機体と仲間入手（後書き）

次回他世界に介入します。

では次回もよかったです楽しんで読んでください。

他世界（前書き）

戦闘シーンが非常に難しい。

でも頑張っていきたいと思います。

他世界

カイト「此所は？」

扉の向こうは戦艦のブリッジのようだった

カイト「マクロス・クォーターのブリッジか」

そう言い周りを見回していると

アムロ「此所は一体？」

ブライト「ラーカイルムのブリッジではないようだな」

刹那「何故俺はこんな所に？」

ヒロ「何故俺達は戦艦に乗っている？」

ゼクス「どうなっているんだ一体？」

周りには俺が仲間で選んだ人達が状況が掴めない状態で立っていた

カイト（レン）

俺は心の中でレンを呼んでみた

レン（どうかしましたかカイトさん？）

よしとりあえず連絡は出来るようだな

カイト（仲間で呼んだ人達全員が状況が掴めていないみたい何だが？）

レン（ごめんなさい。仲間の人達に情報伝達するの忘れてました）

おいおいマジかよ

カイト（じゃあどうすればいいんだ？）

レン（カイトさんの口から伝えてください）

カイト（それしかないよな。分かったやってみるよ）

レン（頑張ってくださいカイトさん）

カイト（ああ出来る限りな）

レンと連絡を切り俺は全員を見た

カイト「取り込み中のところ皆さんすいませんが俺の話を聞いてくれませんか？」

アムロ「君は？」

カイト「俺の名はカイト・トウサカ。今皆さんに何がおこったのかを教えます」

ヒロ「お前はこうなった原因を知っているのか？」

カイト「はい実は……」

その後何故こうなったのかや自分が何者なのかを話した

刹那「つまり今の俺達は全く別の世界にいると言っことだな」

カイト「はっきり言えばそうなります」

アムロ「にわかに信じられない話しだな」

ゼクス「確かに」

ヒロ「この戦艦とお前以外に何か証拠はあるか？」

カイト「格納庫に行けば恐らく分かりますよ」

俺がそう言った後全員格納庫に向かった

刹那「これは何故此所にエクシアが？」

ヒロ「Wガンダムが何故此所に？」

ゼクス「何故破壊されたツールギスが此所に？」

アムロ「リ・ガズイは確か破壊された筈！」

ブライト「確かに彼等の機体を見ると彼等は別世界から来たと言えるな」

カイト「とりあえず全員集まってください」

全員を集めた後一通り話をした

アムロ「つまり俺達は別世界の争いに介入し一緒に戦う為に君が呼んだということか？」

カイト「まあそういうことです」

刹那「俺達の世界に戻る方法は無いんだろ？」

カイト「方法があります。この世界の争いを鎮静化すればいいんです。身勝手なのは分かりますが協力してくださいお願いします！」

俺は頭を下げて全員に言った

ヒロ「いいだろう。戻る方法がそれしか無いのなら俺は戦う」

ゼクス「私もヒロと同意見だ」

アムロ「それしか無いのならやるしかないな」

刹那「この世界から紛争を根絶する為に力を貸そう」

どうやら全員力を貸してくれるようだ

カイト「すいません皆さん勝手に巻き込んでしまった」

ブライト「何こっちとしても戦争を黙って見ることなど出来んさ」

カイト「ありがとうございます」

ヒロ「ところでお前はMSに乗れるのか？」

カイト「はい乗れます」

ヒロ「敬語はやめろ。普通に話せ」

カイト「分かった」

ブライト「此所には階級はない。全員敬語は無しといつてどうだろう？」

ゼクス「了解しました」

ヒロ「了解」

刹那「了解した」

アムロ「ああ分かった」

カイト「了解」

刹那「ところでお前の機体とはあれか？」

刹那が指差す方向には黒と少し赤い部分のあるMSマスラオがあった

カイト「あああれが俺の機体だ」

どうやら今回はマスラオが俺の搭乗機らしい

刹那「俺が前に見たものより形状が若干違うな」

カイト「改良してあるから当然だ」

ブライト「戦力は今のところMS5機とこの艦だけか」

カイト「艦長にはこの艦を完璧に使えるようになってもらわないと」

ブライト「ああその点については任せてくれ」

そして軽い自己紹介を格納庫でしていると突然警報がなった

ブライト「何だ？」

トールレス「艦長こちらに所属不明艦からMSが発進し此方に向かっています！」

あれトールレスさんがいるということはラーカイラムの乗組員がクォーターに乗っているのかな？

ブライト「今からブリッジへ向かう、カイト達は自機に乗って待機してくれ」

5人「了解！」

ブライトさんはブリッジに行き俺達は自身の機体に乗リ機体状況を確認した

カイト「ブライト艦長」

ブライト「どうしたカイト？」

カイト「向かってくるMSの映像を俺に見せてください」

ブライト「分かったトールレス！」

トールズ「はい今映像を送りました」

MSの映像が送られてきたので俺はそれを見た

カイト「これはジンだな」

向かって来たMSはSEEDの世界の一般機ジン

つまり此所はSEEDの世界ということか？

ブライト「どうだカイト奴等は敵か？」

カイト「はい恐らく話も聞いてくれないと思います」

この世界はナチュラルとコーディネーターが争っている時代

恐らくコーディネーターの連中は俺達に攻撃を仕掛けてくる筈

トールズ「MSからミサイルが発射されました。数は10」

ブライト「くっ！撃ち落とせ！」

どうやら連中は仕掛けてきたようだ

ブライト「カイト アムロ 刹那 ヒイロ ゼクス全員出撃してくれ」

5人「了解！」

全員カタパルトにつき

アムロ「アムロ リ・ガズイ行きます」

刹那「エクシア 刹那・F・セイエイ出る」

ヒイロ「Wガンダム発進する」

ゼクス「トールギス出るぞ」

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出る」

俺達5人は出撃し宇宙空間に出た

カイト「流石改造した機体だな」

コックピットで機体の武装を確認し俺は呟いた

カイト「それにGNドライブがオリジナルになっているとわ」

機体内で驚いていると

アムロ「敵機確認手早く片付けるぞ！」

どうやら敵機を捕捉したようだ

4人「了解！」

俺達は散開して敵機と戦闘態勢に入った

ザフト兵「ナチュラルごときが！」

カイト「邪魔だ！」

俺は両手に持っていたビームサーベルでジンを一刀両断し進む

ヒロ「目標確認破壊する」

ヒロはMS部隊にバスターライフを放ち進んでいる

刹那「目標を駆逐する！」

刹那はGNソード？とライフルでジンを撃墜している

ゼクス「遅い！」

ゼクスはドーバーガンで牽制し一気に敵機に近づいて近接戦で破壊している

アムロ「其処だ！」

アムロは持ち前の射撃能力で次々とジンを撃ち落としている

カイト「流石エースパイロットだな」

俺はアムロ達を見ながらそう呟き敵機を斬り裂く

戦闘はそれから数分で終わった

思ったよりあっけなかったな。まあ歴代の最強パイロットが相手ではそうなるか

全員クォーターに帰還し現在ブリーフィングルームにいる

ブライト「この世界のことについてカイトから説明があるそうだが、カイト頼む」

カイト「はい。今皆さんのところにある紙に載っているのが、現在ザフト並びに連合が使っている機体の一覧です」

刹那「この世界で戦っているのはそのザフトと連合か？」

カイト「ああそうだ」

ヒロ「何故奴等は戦争をしているんだ？」

カイト「この世界では一般人間のナチュラル、そして遺伝子操作を受けた人間コーディネーターの二種類の人種がいるんだ」

アムロ「その二つの人種が戦争をしているということかい？」

カイト「はい」

刹那「共存出来ないという理由でか？」

カイト「ああ刹那の言う通り共存が出来ないという理由でこの戦争は始まった」

ゼクス「コーディネーターとナチュラルに何か外見で違いはあるのか？」

カイト「外見で特に違いはない。戦闘能力がナチュラルよりある程度だと思う」

ゼクス「遺伝子を操作されたという理由だけでナチュラルは拒絶しているのか？」

カイト「ああ。戦争を始めたのもナチュラルの愚かな奴等がコーデイナーのコロニーに核を射ったからだ」

アムロ「それではティターンズと同じじゃないか！」

カイト「そうだな」

刹那「何処の世界でも人は争い続けるのか」

アムロ「それが人類の過ちだとしてもやはり変わらないか」

ヒロ「俺達が動けばやはり標的にされるのか？」

カイト「ああ必ずそうなるな。恐らく戦闘はより一層激しくなるのが予想される。それに俺達という介入者が出現したことにより更にな」

ヒイロ「それでもお前は戦うのだろうか？」

カイト「ああ当然だ」

ゼクス「なら早くこんな戦いは愚かなことだと分かせてやらないとな」

アムロ「二度と同じ悪夢を引き起こさない為にもな」

刹那「戦争を引き起こす者を俺達が駆逐する」

ヒイロ「俺達がこの戦いを止める」

ブライト「そうだな。カイト君はどう何だ？」

カイト「俺も皆と同じだ。争いを無くすその為に俺はこの世界に来了。俺は何としても戦いを止めてみせる！」

アムロ「俺達はこれから共に戦う仲間だ。改めて自己紹介をしよう俺の名はアムロ・レイ」

ヒロ「俺の名はヒロ・ユイ」

ゼクス「私の名はゼクス・マーキス」

刹那「俺の名前は刹那・F・セイエイ」

ブライト「私はブライト・ノア」

カイト「俺はカイト・トウサカ」

ブライト「これから戦闘が激しくなるだろうがお互い最善を尽くして行こう！」

5人「了解！」

力を手に入れ仲間も得たカイト。そして彼の長い戦いがこれから始まるのだった

他世界（後書き）

次回はキャラ紹介などの説明です。

ではまた次回も宜しくお願いします。

オリキャラ・機体紹介（前書き）

キャラと機体説明です

オリキャラ・機体紹介

カイト・トウサカ

ガンダムなどのロボット物が好きな青年

見た目は普通の青年だが先祖代々受け継がれる闇を操る力を持っている

だがその力のせいで通常世界では周りからは化け物と呼ばれていた

謎の少女レンに他世界へ行かないかと言われ、自身の存在が否定された世界にいても意味はないと思い他世界への介入者となった

性格は普通だが信用していない人間には常に敬語を使う

所持能力

ニュータイプ S E E D 純粹種イノベーター A級ジャンパー

年齢は二十歳

機体説明

マスラオ改

機体は〇〇に出て来るマスラオ。カイトが気に入っている機体でもある

プラモデルで改造などをしており、レンがその改造したマスラオを選んだので乗ることになった

見た目はマスラオと同じだが、GNドライブがオリジナルになっており、武装も改造したプラモデルと同じ武装を搭載している

武装説明

GNビームサーベル2本

強化サーベル（ウニリュウ・シラヌイ）二本

ファングサーベル一本

GNビームライフル

GNビーム爪

黒刀・斬影

武装はマスラオとスサノウの武器とカイトが思いつきで作った物である

ファングサーベルは20個のファングが連結している剣である

ファングを離しても実態剣として使用可能であり、ファングは彼の意思で自由自在に動く

誘導能力以外にも彼の支持で連結機能を使えばエフィールドのような盾や、腕に何個か連結することで剣にすることも可能

GNビーム爪はカギ爪の形状をした武器であり、ビームを爪に流すことでビームサーベルと同等の攻撃力になる

黒刀・斬影はレンに頼んだ武装で形状は日本刀であり刃の色は黒

カイトの闇の力を使うことによって通常の実態剣以上の切れ味になる

ちなみにカイト自身もこの刀を所持しており、マスラオが持っているのはそれがMSの大きさになった物である

搭載システム

トランザムシステム

ダークネストランザムシステム

GNフィールド

ステルス

システムはたくさんないがトランザムと闇の力を連動させて使用出来るダークネストランザムが使用可能

スピード・パワー共にトランザムより上だが、闇の力をかなり使うのでカイトにかなりの反動がある

その為一度の出撃に一回使用出来る程度であり何度も使用するのは非常に危険

機動時は機体が真っ黒になり粒子も黒い粒子を放出しビーム攻撃なども全て黒くなる

この世界で一緒に戦う仲間

アムロ・レイ

容姿は逆襲のシャアの時

搭乗機 リ・ガズィ

刹那・F・セイエイ

容姿はELS戦の前

搭乗機 ガンダムエクシアR？

ヒロ・ユイ

容姿はエンドレスワルツの時

搭乗機 Wガンダム

ゼクス・マーキス

容姿はエンドレスワルツの時

搭乗機はトールギス

ブライト・ノア

容姿は逆襲のシャアの時

カイト達の母艦マクロス・クォーターの艦長

オリキャラ・機体紹介（後書き）

次回は原作キャラとの戦いです。

では次回もまた宜しくお願いします。

ザフトエースVS歴代エース（前書き）

やはり戦闘シーンが非常に難しい

こんな駄文ですが宜しくお願いします

ザフトエースVS歴代エース

カイト「いつ戦闘になってもおかしくない筈なんだがな」

初戦闘から何日経ったが、何故かクォーターは敵機と戦闘どころか遭遇すらしていない

だがその間にブライトさん達が、クォーターを十分動かせるようになったからいいか

刹那「カイト」

カイト「どうかしたか刹那？」

不意に刹那が話しかけてきた

刹那「お前はイノベーターなのか？」

カイト「何故そう思う？」

刹那「何故だろうなそんな気がするんだ」

もう勘づかれるとは流石純粹種だな

カイト「お前の言う通り俺はイノベーターだ」

刹那「ならお前のあの機体でトランザムバーストは可能なのか？」

カイト「それはやってみないと分からんがまあ可能だろう」

刹那「そうか」

そう言った後刹那は行ってしまった

カイト「結局聞きたいことだけ聞いて行っちゃったよ」

その後俺はクォーター内を適当に歩いた

現在戦闘シミュレーターをやっている相手はヒイロ

カイト「Wガンダムでマスラオを圧倒するとは」

ヒロ「其処だ！」

Wがバスターライフルを放ったのでそれを避けサーベルを抜きお互いのサーベルがぶつかった

ヒロ「まだまだだな」

マスラオのサーベルを弾きWは変形して距離をとった

カイト「なら行けファング！」

ファングサーベルから10個のファングをWに放った

ヒロ「誘導兵器かだが！」

Wはファングの攻撃を避けマシンキャノンで破壊していく

カイト「やはり一筋縄ではいかんか」

わざとファンングをライフルで破壊し強化サーベル シラヌイを装備し突撃したが

ヒロ「お前の敗けだ」

カイト「何！」

Wからバスターライフルが発射され画面には撃墜の文字が表示された

カイト「やはり接近戦専用では不利なのか」

ヒロ「煙で隠れてただ突撃するだけではバレバレだ」

カイト「確かにそうだな」

ヒロと話していると警報がなった

トールス「敵艦接近数は1」

ブライト「敵が来たかMS隊発進準備！」

カイト「来たか」

俺はマスラオ改に乗り発進準備に取り掛かった

ヴェサリウス側

アデス「クルーゼ隊長戦艦らしき物を確認しました」

クルーゼ「ほう何処の艦だ？」

アデス「それがデータに存在していない艦のようです」

クルーゼ「どちらにせよ恐らく連合の戦艦だろう。私とアスラン達で迎撃する」

アデス「また隊長自ら出られるのですか？」

クルーゼ「ああ」

そう言うとクルーゼはブリッジを後にした

ブリーフィングルームにザフトエースは集まっていた

クルーゼ「今回の任務は所属不明艦の撃破だ」

アスラン「所属不明艦？」

イザーク「足つきを追っているというのに」

ディアッカ「なら手早く片付ければいいだけの話だろ」

ニコル「今回もクルーゼ隊長は出撃するのですか？」

クルーゼ「ああ」

アスラン「何故また隊長が自ら？」

クルーゼ「しいて言えば私の勘かな」

アスラン「勘ですか？」

クルーゼ「ああ」

イザーク「とにかく手早く片付けて足つきを追いましょう」

クルーゼ「イザークの言う通りだ。あまり時間を掛けず手早く片付けるぞ」

4人「了解！」

ザフトエースはそれぞれの機体に乗りに出撃した

トールズ「艦長敵艦からMS発進数は5！」

ブライト「MS隊発進！」

アムロ「了解リ・ガズィ　アムロ行きます」

ヒイロ「Wガンダム発進する」

ゼクス「トールギス出るぞ！」

刹那「エクシア 刹那・F・セイエイ出る」

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出撃する」

出撃し宇宙空間に向かうこれが二度目の出撃頑張らないとな

カイト「敵機はガンダムか」

宇宙空間には4機のガンダムとシグーが戦闘態勢に入っていた

アムロ「各機散開敵機を撃墜しろ」

4人「了解！」

俺達は散開し俺のところにイージスが向かってきた

カイトVSアスラン

アスラン「何だこの機体は！」

カイト「イージスかそんな機体などで！」

マスラオのビームサーベルを抜きイージスに突撃する

アスラン「くう」

イージスもビームサーベルを出し応戦したが

アスラン「くっ何てパワーだ」

アスランは手間取っていたイージス以上のパワー　スピードを持ったマスラオに

アスラン「それに何故レーダーが機能しない？」

GNDドライブの影響でレーダーも効かないので更に手間取っていた

アスラン「このー！」

イージスはサーベルでマスラオを弾きビームライフルを連射したが

カイト「避けるまでもない」

カイトはそれを全てサーベルで弾き

カイト「行けファング！」

イージスにファングを発射した

アスラン「何だこれは誘導兵器か？」

カイト「止まっているとはいいい度胸だな」

アスラン「チー！」

イージスは避けてはいるがかなりギリギリのようだ

カイト「こっちも注意しないと」

イージスにライフルを放つ

アスラン「くっ！遊ばれているのか？」

カイト「ふっそろそろ終わらせてもらっ

ファングを戻し黒刀・斬影を抜き

カイト「闇よ我の剣に宿れ！」

斬影に漆黒の闇が集中し刃が更に黒くなる

アスラン「何だあれは本当に剣なのか？」

イージスはサーベルを構える

カイト「行くぞ！」

マスラオでイージスに突撃すると

アスラン「ハァー！」

イージスも此方に突撃しサーベルと斬影が一瞬ぶつかり

ズバンッ

アスラン「何！」

斬影がビームサーベルごとイージスの腕を斬り裂いた

カイト「フアング！」

驚いているアスランをよそにフアングを放ち武装と手 足を破壊した

アスラン「チィ撤退する！」

イージスは戦闘続行不可となり撤退して行った

アムロVSクルーゼ

クルーゼ「あの5機以外に機体が存在していたとはな！」

アムロ「ん何だこの感覚は？」

アムロはシグーを見ながら言う

アムロ「あの機体のパイロット底のない悪意を感じる」

クルーゼ「ちょうどいいその機体を貰い母艦を落とさせてもらう！」

シグーは重突撃銃を乱射しながらリ・ガズィに近寄るが

アムロ「そんな攻撃！」

アムロはそれを全て避け

アムロ「其処だ！」

シグーに向けビームライフルを放った

クルーゼ「チィ！」

シグーは回避行動をとったが片足を打ち抜かれた

クルーゼ「機体だけでなくパイロットも相当な腕のようだな」

シグーは重斬刀を抜き突撃銃を乱射しながら接近するが

アムロ「甘い！」

アムロはシグーの射撃をかわし接近する

クルーゼ「もらった！」

シグーはリ・ガズィに重斬刀を振るったが

アムロ「遅い！」

ズバッ

アムロは重斬刀の斬撃をかわしビームサーベルでシグーの片腕を斬り裂き

アムロ「落ちろ！」

ビームライフルを連射しシグーの両手足を破壊した

クルーゼ「くっ！まさかこれほどとは撤退する」

シグーはヴェサリウスに撤退した

刹那VSニコル

刹那「くっ！まさか迷彩処置をした機体がいるとは」

ニコル「墜ちろ！」

刹那は現在ブリッツと戦闘中だが、ミラージュコロイドによる迷彩状態で攻撃してくるブリッツに手こずっていた

刹那「すぐに消えるなら一瞬で決める」

刹那は止まりブリッツが来るのを待つ

ニコル「何故いきなり止まったんだ」

ニコルは考えたいきなり止まったガンダムを見ながら

ニコル「もう諦めたのか？なら！」

ブリッツはエクシアの背後に周りサーベルで斬ろうとした瞬間

刹那「其処だ！」

刹那はリーダーにブリッツが現れた瞬間斬撃を避けGNブレイドで両手を破壊した

ニコル「な何！撤退します」

ブリッツも戦闘不能となり撤退した

ヒロVSイザーク

イザーク「このチョロチョロと！」

ヒロ「実弾が効かないならサーベルで戦っただけだ」

ヒロは変形しながら射撃を回避しサーベルを抜いた

イザーク「ナチュラルごときが俺に勝てると思うな！」

デュエルもサーベルを抜き応戦する

ヒロ「何故互いに争うことしか出来ない？」

イザーク「ナチュラルは俺達コーディネーターの敵だ！そんな奴等と仲良くなど出来るか！」

ヒロ「お前もアイツ等と同じかなら」

サーベルでデュエルを弾き

ヒロ「排除する！」

Wガンダムからバスターライフルがデュエルに向け放たれた

イザーク「ふんそんなもの！」

デュエルは盾を構えガードをしただが

イザーク「何シールドが持たない！」

バスターライフルの威力は通常ライフルの倍があるので当然である

デュエルはシールドごと腕をもっていかれた

イザーク「チィ！」

ヒロ「そこだ！」

ヒイロは変形しサーベルを抜きデュエルのライフルを破壊した

イザーク「チィ俺がナチュラルごときに！」

デュエルは撤退した

ゼクスVSディアッカ

ディアッカ「何だよこの動きは！」

ゼクス「砲撃主体のガンダムかならば！」

ゼクスはトールギスのブースターで一気に加速しバスターに接近する

ディアッカ「そう簡単に接近接近させるかよ！」

バスターはライフルとミサイルをトールギスに発射するが

ゼクス「甘い！」

ゼクスはライフルを避けミサイルを全てサーベルで破壊した

ディアツカ「なら！」

バスターはライフルを連結させ散弾をトールギスに発射した

ゼクス「そんなもの！」

ゼクスはブースターを使い上昇し散弾を避けドーバーガンをバスターに発射し

ディアツカ「な！」

バスターは回避が間に合わず連結したライフルが破壊された

ディアツカ「くそ本当にナチュラルかよ！撤退する」

バスターは撤退して行った

カイト「言った通り全員殺さないでくれたようだな」

俺はレーダーから離れる敵機を見て呟く

カイト「一応重要キャラ達だから死なれたら困るしな」

クォーターから発進する前に、アムロ達に今回の敵機のパイロットを殺さないでくださいと言っておいてよかったな

流石にアスラン達がいきなり死んでは話が全く分からなくなるし

カイト「とりあえずまずはアークエンジェルとでも接触かな」

トールレス「MS隊帰還せよ」

トールレスから通信が入った

カイト「了解。さてこれからどうなることやら」

俺はそう呟きクォーターに帰還した

ザフトエースVS歴代エース（後書き）

次回はジャンク屋と歌姫と接触します

では次回も宜しくお願いします

想定外の出会い（前書き）

更新送れてすいません

やはり戦闘シーンは書くのは苦手です

想定外の出会い

カイト「刹那敵機の反応は？」

刹那「レーダーでも反応無し付近にはいないようだ」

現在俺と刹那はザフトレッド達を退け今は偵察中である

何故俺と刹那なのかはまあGNドライブの影響で視認されにくいからである

ブライト「カイト 刹那周辺の状況はどうだ？」

ブライトさんが確認の通信を送ってきた

カイト「レーダーにも敵影はありません」

刹那「同じく反応無し」

ブライト「そうか。もう暫く偵察を続けてくれ」

カイト& a m p・刹那「了解」

その後も暫く周辺の偵察を続けていると

カイト「うん？レーダーに反応」

前方に反応あり 数は7

3機はM Sのようだがもう4機はM Aか？

カイト「クォーターレーダーに反応確認。どうする？」

ブライト「反応地点に向かって状況を確認してくれ。攻撃してきたら戦闘しても構わん」

カイト「了解。刹那向かうぞ」

刹那「了解」

とりあえず俺と刹那は反応が出た所に向かった

刹那「前方に機影を確認」

反応地点に向かうと2機のジンと3機のメビウスが赤いフレームのMSと戦闘していた

カイト（あの赤いフレームの機体恐らくレッドフレーム、ということとは近くに歌姫がいるのか？）

刹那「どうするカイト？全機撃墜するか？」

カイト「いやあの赤いフレームのガンダムを援護しよう」

刹那「その理由は？」

カイト「見たところザフトと連合どちらの味方でもないようだから」

刹那「ふっ了解した」

俺達は戦闘態勢に入りガンダムに通信を入れた

カイト「其所の機体のパイロット聞こえるか？」

？「何だアンタ達は？」

通信に答えてくれ返答しようとした瞬間

ザフト兵「落ちろナチュラル！」

ジンが此方に重突撃銃を撃ってきたので回避し

カイト「雑魚がでしゃばるな！」

ザシュツ

ザフト兵「ば馬鹿な！」

サーベルで一刀両断してやった

カイト「これからお前を援護する」

敵機の攻撃を避けながら答える

？「すまないな巻き込んだみたいで」

刹那「もとよりお前を援護するつもりだったから問題ない」

刹那も通信にはいつてきたようだ

？「ありがとうな、俺はジャンク屋のロウ・ギョールだ」

刹那「俺の名前は刹那・F・セイエイだ」

カイト「俺の名はカイト・トウサ力だ」

ロウ「刹那にカイトが宜しくな」

カイト「ああ宜しく。さて敵が来たぜ」

いつの間にかジンが消え周りにはメビウスと連合艦がいた

刹那「ザフトは艦が来たことにより撤退したようだな」

ロウ「そうみたいだな。どうする？」

カイト「どうせ生きて返す気はないんだから全機撃墜しかない」

刹那「了解した」

ロウ「ああ了解」

二人がそう言った後俺達は連合艦に向かった

カイト「艦を落とせばメビウスごときなら撤退する筈だ。メビウスを落としながら敵艦を落とすぞ」

刹那& a m p・ロウ「了解」

ロウ「この！」

ロウのレッドフレームはライフルとサーベルで上手くメビウスを落

とし

刹那「駆逐する！」

刹那のエクシアはブースターを使いメビウスを次々とGNブレードで破壊していく

カイト「行けファング！」

俺はライフルとファングで簡単にメビウスを撃墜する

連合兵「なっ何だこいつ等は！」

連合兵「強すぎる！」

連合兵が動揺しているようだがどんどん破壊していく

気がついたら敵は艦だけになっていた

刹那「降伏しろ！そうすれば見逃してやる」

刹那が連合艦に呼びかけた。降伏しろよ無駄な殺生はごめんだからな

連合兵「誰が降伏などするものか！全ては青き清浄なる世界の為に
！」

そう言い連合艦は俺達に攻撃をしてきた

ロウ「くそ何でだよ！何で攻撃してくるんだ！」

カイト「完全にブルーコスモスの兵になっているようだな」

刹那「どうする撃墜するか？」

カイト「俺がもう一度呼びかける」

連合艦に通信を入れる

カイト「もう一度だけ言う降伏しろ！そうすれば見逃してやる」

降伏してくれよ頼むからよ

連合兵「黙れ！降伏などせん！奴等を叩け！」

連合兵士は降伏勧告を受け入れず攻撃を続ける

ロウ「くそ！どうしてだよ！何で無駄に命を捨てるんだ！」

カイト「屑共が何故命を無駄にする！」

フアングを発射し連合艦に攻撃する

一瞬で連合艦は墜ちた

ロウ「くそ！」

カイト「馬鹿共が」

刹那「何処の世界も歪んでいるな」

虚しい、敵を倒したのに何故だ？くそっ！

カイト「やはり非情になりきれないんだな」

虚しい気持ちでそう呟き俺はレーダーを見る

カイト「やはり反応があるか」

レーダーに一つ反応がある恐らく

刹那「カイト反応が一つあるが」

カイト「ああ行ってみよう」

ロウ「俺も行くぜ」

俺達は反応があつた場所に向かった

カイト「やはりか」

反応地点には一機の脱出ポットがあつた

カイト（此所で歌姫を救出していいのだろうか？後々面倒なことになる気がするが）

どうしようか考えていると

ロウ「カイト脱出ポット拾わなくていいのか？」

いつまでもポットを拾おうとしない俺を見てロウが通信を入れてきた

刹那「速くしないと敵が来るかもしれん。カイト回収してくれ」

カイト「・・・分かった」

ちっ回収しないという選択肢はないようだな

しょうがなくポットを回収し戻ることにした

カイト「ロウ此所でお別れだな」

クォーターに向かうのでロウにそう言ったら

ロウ「悪いんだがよホームとはぐれちまったみたい何だ。おこがましいけどよ、暫くお前等の艦に置いてくれないか？」

嘘だろ原作と展開が違っぞって、既に歌姫助けてる時点で違っか

カイト「分かったならついてこい。刹那クォーターに帰還するぞ」

刹那「分かった」

俺はクォーターに通信を入れた

カイト「クォーター今から帰還する」

トールレス「了解」

ブライト「何か収穫はあったか？」

カイト「脱出ポット一つとMS1機ですね」

ブライト「そうか一度帰還してくれ」

カイト「あつ艦長味方とはぐれたジャンク屋がいるのですが、一緒にクォーターに向かつていいですか？」

ブライト「味方とはぐれたジャンク屋？信用出来るなら構わん」

カイト「ありがとうございます艦長では帰還します」

俺達はクォーターに向かった

ロウ「スゲーな何だこの戦艦！」

ロウがクォーターを見てかなり驚いているようだ

まあこの世界にはない戦艦だから驚くのも無理はないか

カイト「着艦するからついてこい」

カタパルとに向かい全員無事に着艦成功

アムロ「二人共お疲れ」

ゼクス「何か収穫はあったか？」

コックピットから降りたらアムロ達が来た

カイト「味方からはぐれたジャンク屋と脱出ポット一つぐらいだ」

ヒロ「そのジャンク屋とは奴のことか？」

刹那「ああ今クォーターを見ている奴だ」

刹那が艦内を見ながら驚いているロウを指差し答える

カイト「ロウ 仲間を紹介するからこっちに来てくれ」

ロウ「ああ分かった今行く」

そう言いロウは俺達の機体を見ながらこっちに来た

ロウ「スゲーなこの艦もアンタ達のMSもさ、おっと俺の名前はジヤンク屋のロウ・ギョールだ」

アムロ「アムロ・レイだ宜しく」

ゼクス「私はゼクス・マーキスだ」

ヒイロ「俺はヒイロ・ユイだ」

ロウ「ありがとうな見ず知らずの俺を艦においてくれて」

ロウが頭を下げて礼を言った

アムロ「何困っている時はお互い様さ」

ロウ「ありがとよアムロさん」

ゼクス「そう言えば脱出ポットをまだ開けていなかったな」

ちっ！そのまま放置しておけば面倒なことにならないのに

ゼクス「ロウあの脱出ポットに何か心当たりはないか？」

ゼクスが脱出ポットを見ながらロウに聞く

ロウ「俺が偵察に出てすぐあの近くでシャトルの反応が消えたんだ。もしかしたらそのシャトルの乗組員かもしれない」

ヒイロ「開ければ全て分かることだ」

刹那「そうだな」

アムロ「よしじゃあ開けるぞ」

アムロが脱出ポットを開けると

ハロ「開いた 開いた」

アムロ「これはハロか？」

？「ありがとうございます」

ポットを開けるとピンク色のハ口が出てきてその後ろからピンク色の髪の女の子が出て来た

刹那「女？」

？「あら？あらあらこの艦はザフトの艦ではないのですか？」

カイト「はいこの艦はザフトの艦ではありません」

？「ではあなた方は連合軍の方ですか？」

ゼクス「いや我々はどちらにも属していない」

？「そうなのですか？」

ヒイロ「とりあえずお前の名前は何だ？」

？「私はラクス・クラインと申します」

ロウ「マジかよ!」

アムロ「どうしたロウ?彼女の名前に心あたりがあるのか?」

ロウ「心当たりも何もラクス・クラインってプラント最高評議会
長のシーゲル・クラインの娘じゃないか」

カイト「ああめんどいことになるなこりゃ」

俺は溜め息を吐きながらそう呟いた

想定外の出会い（後書き）

次回は歌姫の処遇についてです

ではまた次回も宜しくお願いします

歌姫の処遇と人との違い（前書き）

今回は私自身が思う人との違いなどが書いてあります

歌姫の処遇と人との違い

カイト「あのラクス・クラインの処遇はどうします」

現在ラクス・クラインの処遇について話しをしている

アムロ「捕虜として扱うのが妥当だろう」

ヒイロ「だが敵のスパイかもしれない」

刹那「それは、警戒のしすぎだと思いがヒイロ」

ヒイロ「あくまで可能性の話しだ」

カイト「スパイだったら始末すればいい問題ない」

ゼクス「まあその心配はないと思うがな」

ブライト「では決まったな。処遇は捕虜として扱う」

まあ今のところ捕虜が妥当だろう。それに俺は歌姫は好きじゃねえしな

カイト「食事は俺　アムロさん　ゼクスの三人で運びますね」

ヒロ「何故俺と刹那ははいつていない？」

カイト「無口で無愛想な奴だと気まづくなると思ってたな」

アムロ「確かに一理あるな」

ゼクス「ヒロも刹那もいつも無愛想な顔をしているしな」

二人「大きなお世話だ」

などと話をしていたら突然扉が開いた

全員「！」

ラクス「あのすいません」

ラクスがハ口を持って部屋に入ってきた

ヒロ「部屋の扉にロックをしなかったのか？」

刹那「したに決まっているだろう」

カイト「普通しない馬鹿はいないだろ」

アムロ「どうかしたかい？」

ラクス「いえ、この艦の中を見てみたくて」

自分の立場が分かっているのだろうかこの歌姫は？

アムロ「扉のロックはどうしたんだい？」

ラクス「この子が開けてくれました」

ハロ「ハ口開けた。ハ口開けた」

ハロが叫んでいる。普通ロック開けたりするか？

カイト「ラクスさん、あまり艦内を歩き回らないでください」

ラクス「すみません」

ゼクス「貴方は、一応捕虜ですからそこは分かっていたいただきたい」

ラクス「・・・はい」

カイト「では、部屋まで送りますよ」

ラクス「分かりました」

俺はラクスを連れ部屋に向かった

ラクス「皆さんは、何故私がコーディネーターというのを気にしないんですか？」

部屋に送るとラクスが俺に聞いてきた

カイト「全員何で気にしないのかは知りませんが、私自身そんなちっぽけなこと気にしませんよ」

ラクス「どうしてですか？」

カイト「コーディネーターもナチュラルも両方人間、それを少し違うからって差別するなどくだらなくありませんか？」

ラクス「そうですね」

カイト「それに人間誰しも違うところは必ずあります。それがコーディネーターだから違うというのなら、ナチュラルで運動神経がいい者、歌が人より上手い者、周りの人間より遥かに頭がいい者も対象に含まれると思いますよ」

ラクス「何故、人より優れた者が対象に含まれるのですか？」

カイト「コーディネーターは、遺伝子をいじって優れた能力を与えていると聞きます。ならその解釈をナチュラルでもすると、優れた能力があるナチュラルの者も、周りのナチュラルとは違ってくるのでコーディネーターと同じという解釈になると思うからですよ」

実際これが俺の、ナチュラルもコーディネーターもどちらも同じ人

間であるという仮説の話しである

ラクス「言われてみると、確かにそうなのかもしれません」

カイト「まあ、そういうことですよ」

ラクス「貴殿は、とても広い心をお持ち何ですね」

カイト「そんなことはありませんよ」

ラクス「貴殿方のような人達が、今の世にたくさんいれば、戦争などおきなかったかもしれませんね」

カイト「それは、分かりませんよ」

ラクス「え？それはどういう意味ですか？」

カイト「いえ、今の発言は気にしないでください」

俺はそう言い部屋を後にした

カイト「何で俺は、あの歌姫に素直に自分の考えを言ったんだろう？」

そんなことを呟きながら歩いていると

アムロ& a m p・刹那「カイト」

アムロと刹那が後ろから声を掛けてきた

カイト「どうかしましたかアムロさんに刹那？」

アムロ「いや、さっき君が話していたナチュラルとコーディネーターの話しを偶然聞いてしまったな」

刹那「その話を聞いて、お前に聞きたいことがあってな」

カイト「ニュータイプそしてイノベーターと普通の人が、どう違うのか俺に聞きたいのか？」

何となくそんな気がしたので聞いてみた

アムロ「ああ、君はどう違うと思う？」

刹那「お前の考えを聞きたいんだ」

カイト「俺の中では、ニュータイプもイノベーターもよりよく分かり合う為に覚醒した人間だと思う」

二人「よりよく分かり合う為に覚醒した人間？」

カイト「ああ、ニュータイプもイノベーターも優れた空間認識能力を持っている。馬鹿な奴等はそれを兵器の為に能力としか思っていない。だが本当はよりよく分かり合う為にそれはあるんだと俺は思う」

アムロ「何故、空間認識能力が分かり合う為に必要だと思うんだ？」

刹那「何か理由があるのか？」

カイト「認識能力の拡大などによる、意思疎通、精神の共感などが可能になるからだ」

アムロ「意思疎通に精神の共感？」

カイト「二人は既に何回かおこっている筈ですが？」

アムロ「ララアと分かり合えた時のことか？」

カイト「そうです」

刹那「トランザムバーストによっておきた、あの現象のことか？」

カイト「そうだ。そして二人はその力で分かり合うことが出来たでしょう？」

アムロ「ああ、死なせてしまったが確かに分かり合えた」

刹那「確かに、俺達は分かり合うことが出来た」

カイト「ニュータイプもイノベーターも、本来はその為にいるのだと俺は思います。確かに普通の人間とは少し違うかもしれませんが、だが人を分かり合わせる為に覚醒した者達だと俺は考えています」

これが俺の中でのニュータイプとイノベーターの仮説である

彼等は人類を分かり合わせる為に進化した者達なのかもしれない

だが俺は進化したという考えではなく、覚醒したという考え方である

いずれは人類の全てがニュータイプやイノベーターに覚醒するなど
思っていたりする

カイト「人間は違うところがあります。それが、ニュータイプ
だろうとイノベーターだろうと、結局はそういう力を持った人間に
変わりありませんから。」

二人「……」

カイト「まあ、結局何が言いたいのかというと、ニュータイプもイ
ノベーターも人間とあまり違い何てないんですよ。はっきり言えば
普通の人より分かり合う力があるだけです」

アムロ「分かり合う力がある？」

カイト「ええ。俺はそう思います」

刹那「だが周りの仲間は」

カイト「自分は人間とは違うなどと気にして、周りと距離をとる必要なんてないんですよ」

俺はそう言い刹那を見た

刹那「……」

カイト「貴殿方が、イノベーターだろうとニュータイプだろうと、周りの仲間はちゃんと一緒にいてくれるんですから」

アムロ「ふっそうだな。俺がニュータイプでもブライト達は一緒にいてくれたからな」

刹那「本当に、仲間は一緒にいてくれるのだろうか？」

カイト「それは、刹那君次第だ。君が心を閉ざさず仲間と一緒にいれば必ず彼等は君と一緒にいるだろう」

刹那「……」

カイト「まあ俺が言いたいのはいくらでもあります」

俺はそう言い自室に戻った

ああそう言えば、ロウはクォーターにいる間はパイロット兼整備班の仕事をしてくれるそうだ

ちなみにロウは現在、ヒイロとゼクスがWガンダムとトールギスのビームライフルを製造してくれという依頼を受け、クォーターの格納庫でビームライフルを作成中である

何故か、クォーターの倉庫には様々な部品が保管されていたようで、それを見たロウが嬉しそうに見ていた所を、ヒイロとゼクスが見つ付けて依頼したそうだ

これでまた戦力は高くなったな。そう言えば全員のMSをまだ解析してなかったから今度ロウに解析してもらおう

歌姫の処遇と人との違い（後書き）

ニュータイプやイノベーターのことはあくまで私の仮説です

気にさわるようならすいません

ではまた次回も宜しくお願いします

接触（前書き）

今回はちょっと前の話から若干飛んでいます。

では今回も宜しくお願いします。

接触

ブライト「あの娘を、ザフトに返すだど？」

クォーターのブリーフィングルームでブライトがカイトに聞く

カイト「はい」

ゼクス「何か理由があるのか？」

ゼクスが俺を見て言う

カイト「理由というより、ただ敵に狙われないようにする為ですよ」

正直俺は歌姫は嫌いな上に、アイツは敵も引き付ける疫病神と認識している

カイト「彼女はザフトのトップの娘です。恐らくもう俺達と一緒にいるとばれてるでしょう」

ヒロ「だからアイツを返し、ザフトの目から逃れようと言っのか

？」

ヒイロは壁にもたれながら俺を見てそう言う

表情があまり変わっていない以上、どう思っているのかは分かんが

カイト「ああ、そのほうが俺達にとってもいいと思ってな」

まあ本当はアークエンジェルと接触する為だが

もし接触できなかったとしても、疫病神をアスラン達に押し付けられるしな

アムロ「しかし、誰がザフトと接触するんだ？」

カイト「俺が、一人で行きます」

ゼクス「一人で行くのは、流石に危険じゃないか？」

カイト「問題ありませんよ。それに下手に数を増やすと警戒される」

誰か居ても別にいいが、一人のほうが動きやすい為出来れば俺だけのほうがいい

ブライト「いいだろう。行つて構わん」

ブライト艦長があつさり了解してくれた

刹那「ブライト艦長、今回は流石に危険だと思うが？」

ブライト「確かにそうかもしれない。だが下手に大勢で行くより一人のほうがいいだろう」

アムロ「だがブライト」

ブライト「それに、カイトの機体のGNドライブなら万が一敵に囲まれても姿を隠し帰還も可能だ」

まあ確かにステルスを使えばそれは可能だ、だが了解してくれるとはな

ヒイロ「なら俺も着いて行く」

カイト「何？」

ヒロが思いもよらないことを言ってきた

ゼクス「ヒロ本気か？」

ヒロ「ああ、俺と一緒にいけば問題ないだろう」

カイト「ヒロお前何で？」

ヒロが一緒に行くと言う発言が気になり聞く

ヒロ「俺と一緒に行けば、もし敵に包囲されても問題ないだろう」

俺の腕とヒロの腕があればそう簡単にやられないと言いたいのか？

刹那「ヒロが一緒なら大丈夫だな」

アムロ「それなら問題はないな」

ゼクス「ヒイロもまるくなつたものだな」

全員俺一人では心配だつたようだがヒイロが一緒なら大丈夫だろう
と言っている

俺ってそんなに弱いのか？まあこの中では一番弱いと思うが

ブライト「では決まりだな、カイトとヒイロはあの娘をザフトに返
してきてくれ」

二人「了解」

俺とヒイロはブリーフィングルームを出る

カイト「何故、着いて来る何て言つたんだ？」

俺はまだヒイロの発言が気になり聞く

ヒイロ「お前は俺達の仲間だ。死なれては困るからだ」

ヒロが無表情で言う。エンドレスワルツ時のヒロの為なのか、味方を大切な仲間と思っているようだ

まあヒロにそう思われているんなら正直嬉しいがな

俺とヒロはそのまま歌姫の部屋に向かった

コンコン

カイト「ラクスさん、居ますか？」

歌姫の部屋をノックしているか確認する

ラクス「はい、おりますよ」

カイト「入ってもいいですか？」

ラクス「はい、どうぞ」

カイト「失礼しますよ」

ヒロ「……」

俺は一言いいヒロは無言で歌姫の部屋に入る

ラクス「どうかしましたか、カイトさんにヒロさん？」

面倒だから用件だけ言ってとっと出よう

カイト「貴方を、ザフトへ返すことになりました」

ラクス「それは本当ですか？」

ヒロ「ああ本当だ」

カイト「準備が出来たら格納庫に来てください。では私は此で」

ヒロ「……」

用件を言った後俺とヒロはさっさと出て行った

格納庫に向かうとロウがいた

カイト「よう、ロウ」

ロウ「ようカイト、どうかしたのか？」

カイト「今から、ちょっと歌姫を返しにザフトに会いに行くんだ」

ロウ「マジかよ！」

カイト「ああマジ」

ロウ「お前も、たいへん何だな」

カイト「まあな」

ヒロ「ロウ、頼んでおいた物は出来たか？」

ロウ「ああ、ばつちりだ」

ロウはそう言いウイングガンダムを指さす

カイト「見事なもんだな」

ウイングガンダムの腕にはビールライフルが握られていた

流石はロウだな、少しの間につくるとは

ヒロ「感謝するロウ」

ロウ「何、こつちもメカをいじらせてもらってありがとな」

何ともロウらしい答えだ

ラクス「カイトさん」

ロウと話しているとラクスが宇宙服を着てこちらに来た

カイト「では、ラクスさんには私のマスラオに乗ってもらいますから」

ラクス「分かりました」

ヒイロ「では行くか」

その後歌姫とマスラオに乗り

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出る」

ヒイロ「ウイングガンダム 発進する」

カタパルトから出撃した

カイト「さて何処にいるかな」

レーダーを見ながら探す。今のところ機影なし

ラクス「何故、私を返してくれるのですか？」

ラクスが俺の顔を見て聞く。 まあそれが当然か

カイト「私達と、貴方が一緒にいても特に意味はないからですよ」

実際、一緒にいてもザフトの標的にされるだけだし

なら、ザフトに返したほうが面倒なことにならないだろう。 多分

まあ、本当の目的はアーケエンジェルと接触する為と、歌姫に彼と会ってもらう為だが

ラクス「ですが、私を返した後に攻撃をされたらどうするのです?」

愚問だな答えは勿論

カイト「私とヒロで、殲滅するまでですよ」

俺がそう言うのと歌姫は黙り、その瞬間レーダーに機影確認

ヒロ「カイト、MS一機と戦艦が来るぞ」

ヒロから通信が入る

カイト「さて、何が来たかな？」

目標をズームして見てみると

カイト「これは、面白い」

向かってきた機影はストライクとアークエンジェル

探す手間が省けて丁度よかった

ヒロ「あのMSと戦艦は、前にお前からの資料で見た連合のものか？」

カイト「そうだ、手を出すなよ。まず出方を伺おう」

とりあえず、まずは相手がどうでるかをみよう

？「其所の二機、応答願います」

カイト「何だ？」

相手に通信を入れる。この声はラミアス艦長だな

ラミアス「あなた方は、何処の所属ですか？」

いきなり所属を聞くか

カイト「私達は、何処の所属でもありません」

？「何処の所属でもないだと？」

さつきとは違う声、恐らくナタルさんか

ラミアス「少し、事情を説明していただきたいので艦に来てくれませんか？」

阿呆か、通信でも十分　なのにわざわざ艦に呼ぶとは

まあこれで接触出来るからいいか

カイト「私達の、身の安全と機体を調べないのならいいですよ」

ラミアス「分かりました。ではストライクと一緒に着艦してください」

？「艦長！」

最後に声が聞こえたが通信はそこで切れた

ヒロ「いいのか？あの艦と接触して」

カイト「ああ問題ない。大丈夫だ」

それに歌姫も押し付けれるしな

俺達はストライクと共にアークエンジェルに着艦した

接触（後書き）

次回はアークエンジェルクルーとの会話です。

ではまた次回も宜しくお願いします。

クルーとの会話（前書き）

更新遅れてすいませんでした。

ではござ

クルーとの会話

アークエンジエルの格納庫に入ると、クルー全員が俺とヒイロの機体の周りに集まっていた

カイト「すいません。ラクスさん、巻き込んでしまつて」

マスラオ内で歌姫に頭を下げる。本当は、下げたくないんだがしよ
うがない

ラクス「いえ、お気になさらないください」

歌姫は、普通にあの場ではしよがないと思つたのか俺にそう言う

カイト「すいません」

俺はもう一度頭を下げ、モニター越しにいるクルーを見る

カイト（そろそろと、集まつて来やがつたな）

全員、珍しい物を見るような目で見ている。まあ、見たことないM

Sが目の前にあれば当然か

カイト「では、ラクスさん行きましょう」
ラクス「はい」

俺は、歌姫の手を握りコックピットを開け下に降りた

ヒロも丁度降りたようで下で合流した

？「おい、ちょっと通してくれ」

集まっている奴等の、後ろから3人こっちに向かってきた

恐らく、ラミアス艦長とナタルさんそれと鷹だろう

ナタル「君達が、この機体のパイロットか？」

ナタルさんが睨みながら俺とヒロを見て聞いてくる

ヒロ「そつだ」

カイト「そうですか」

俺とヒイロは無表情で普通に答える。すると周りが騒ぎ出した

ラミアス「まだ、子供じゃないの」

カイト「何を、驚いているんです？あれのパイロットも、同じぐらいのコーディネーターの少年が乗っているでしょう」

そう言った瞬間俺はナタルさんに睨まれた

ナタル「貴様！何故パイロットのことを知っている！」

カイト「パイロットは、あなた方の後ろにいる彼だと思ったからですよ」

俺がそう言った後、全員後ろを見ると其所にはパイロットスーツを着たキラが立っていた

ムウ「率直に、言わせてもらおうが」

鷹が俺達を見て喋り出した

ムウ「君達、コーディネーターだろ？」

下らない質問だ。こいつは、MSに乗ってる奴等全員コーディネーターとでも思ってるのか？

カイト「残念ながら、答えはNOですよ」

そう言った瞬間、ナタルさんにまた睨まれたがまあ気にしない

ラミアス「じゃあ、あなた達はナチュラルなの？」

カイト「以外何があるんですか？まあ、一人違いますが」

ムウ「違う？」

ヒロ「その話は、別の部屋でしないか？」

ヒロが、周りを見ながら言う。確かに此所では話ずらいな

ラミアス「分かりました。じゃあこっちへ」

ラミアス艦長に案内され、俺達は別室に案内された

ムウ「それで、一人違うとはどういうことだ？」

部屋に入り、座った瞬間鷹が聞いてきた

カイト「質問の前に、あなたは場を考えて発言をしたほうがいいですよ」

一応忠告してやる

ムウ「ああ、それについては俺も反省してるよ」

カイト「ならいいですが」

ナタル「それで、一人違うとはどういうことだ？」

ナタルさんが俺を睨み同じことを言う

カイト「言った通りの、意味ですよ。ラクスさん」

俺が歌姫の名前を呼ぶと、歌姫はヘルメットを取った

ラミアス「え？ラクスさんてまさか！」

どうやら知っているようだ。まあ有名人だから当然か

ムウ「まさか、あのプラント最高評議会議長の娘か？」

ヒロ「そうだ」

全員「な！」

全員驚いている。まさか、こんなところで最高評議会議長の娘と会うとは、思わなかったからだろう

まあ、本当はもう少し早くこの艦にいる筈何だがな

ナタル「やはり貴様等は」

カチャ

ナタルさんが、俺達に銃を向けてきた

ヒロ「何のつもりだ？」

ヒロが、目を細めてナタルさんを睨む

ナタル「お前達二人も、コーディネーターなのではないのか？」

阿呆か、この人は人の話を信用しないのか？

カイト「仮にそうだとしても、何故銃を向けるんです？まさか、コーディネーターだからという理由じゃありませんよね？」

ナタル「そうだと言ったら、貴様はどうする？」

ナタルさんが睨み俺に言う。本当下らねえ

カイト「別に、ただ呆れるだけですよ」

ナタル「何？」

俺の答えが以外だったのか、ナタルさんが驚いている

カイト「何もやっていない人間に、銃を突き付ける。それが、連合軍の人に対しての態度かと呆れるだけですよ」

ため息を吐きながら俺は言う

ナタル「コーディネーターは、人とは違う」

はあ違う？ やっぱり所詮は連合兵か

カイト「何が違うんです？ 優れてるから何て言ったら、ナチュラルだってコーディネーターに匹敵する能力を持っている人がいるでしょう？ 容姿も何も変わらないのに、何が違うんですか？」

ナタル「違うな、奴等は我々より優れた力を持ちそして我々人間を見下す敵だ！」

カイト「それは、あなたの勝手な考えでしょう？今此所にいるラクスさんやさっきの少年はあなた方を見下していましたか？」

ナタル「それは・・・」

カイト「あなたも、ブルーコスモスと同じようになりたいんですか？コーディネーターという理由で罪のない人を殺し、コーディネーターは全て敵という解釈をするんですか？」

ナタル「私は、奴等のような人間ではない」

ヒロ「アンタの今の、発言行動は十分ブルーコスモスと同じと言えると思うが？」

ナタル「く！」

俺の発言と、ヒロの発言によりナタルさんは黙った

ラミアス「とりあえず、その話は中断しましょう」

ラミアス艦長が話を中断させた

カイト「分かりました」

ヒロ「……」

ムウ「一応聞くが、お前達はザフトじゃないんだな？」

ヒロ「ああ、そうだ」

ラミアス「じゃあ何で、あなた達は彼女と一緒にいるの？」

まあ、それは当然の疑問だな

カイト「私と仲間が、偵察に出た時その先で連合とザフトが戦闘してしましてね。その近くで、ラクスさんの乗る脱出ポッドを発見し回収したからですよ」

本来ならその時、ロウがいなくなつた後で漂流していたポッドを、ストライクが回収するんだがな

ヒロ「それで、ザフトにそいつを返そうと思った時お前達と遭遇した」

簡単に事情を説明し終わると、ラミアス艦長とナタルさん鷹の三人が小声で何か話をし出した

暫くすると全員俺達を見る

ラミアス「君達の乗っているMSは、何処で手に入れたの？」

カイト「私達が、独自に開発した機体としか今は言えません。出来れば、あまり機体のことには触れなくてください」

機体のことは、こう言わないと色々面倒だからな

ラミアス「分かりました。それは本艦に来る時の、条件でしたからこれ以上は触れません」

ナタルさんが、納得いかない顔で俺達を睨んでいるが機体の話は終わった

ムウ「分かっていると思うが、暫くお前達はこの艦に乗ってもらうぞ」

やはりそうなるか。まあ予測範囲内だがな

カイト「分かりました」

ヒロ「了解した」

ナタル「それと、貴様等にはこの艦を護衛してもらいたい」

カイト「私達のような、得体の知れない者にこの艦を守れとは何故です？」

理由は恐らく、戦力が足りないからだろうがあえて聞く

ナタル「悔しいが、本艦には戦力が足りない」

ラミアス「だから今は、猫の手も借りたい状況なの」

予想通りの答え

カイト「いいでしょう。ただし条件があります」

ラミアス「条件？」

カイト「はい。私達をこの艦が連合艦隊と合流するまで、雇ってほしいんです」

ムウ「雇う？」

カイト「はい」

ただ働きは、正直好きではない。少しでも得をしないと

ナタル「その条件を、拒否したら？」

カイト「別に、私達は此所からいなくなるだけですよ」

さあどうする？まあ恐らく雇うと思うがな

ラミアス「・・・分かりました。貴方達を雇います」

ナタル「ラミアス艦長！」

カイト「了解しました。さてヒロそういうことだが構わないか？」

ヒロ「ああ構わない」

俺達は三人を見る

ヒロ「ただし、俺達を後ろから撃つような真似をしたら」

カイト「その時は、覚悟してくださいよ」

俺とヒロは三人に殺気を出しながら言う

ムウ「そんなこと分かっている」

ラミアス「決して、そんなことはしないと約束します」

ナタル「ただし、貴様等が逆に我々を裏切ろうとしたら」

カチャ

ナタルさんが再び銃を向けるが

ザンッ

全員「な！」

俺は斬影でナタルさんの銃を切り裂いた

カイト「あまり、私に銃を向けないでください。ハハハ裏切り何かしないので大丈夫ですよ」

カチャン

斬影を鞘にしまい俺は笑いながら三人を見ていう

ムウ「お前」

ヒロ以外の奴等は、俺を睨むどころか怯えているようだ

まあ、いきなり刀を抜いて笑いながら三人を見ればそうなるな

昔から、何かを向けられるとついそれを破壊したくなる

全く悪い癖だな

カイト「すいません。ちょっと癖が出てしまいました」

ここは素直に頭を下げておく、俺が悪いからな

ラミアス「そそう癖なの、・・・とりあえずフラガ大尉彼等を部屋に案内してあげて」

ムウ「ああ分かった。付いてこい」

カイト「その前に、まだ名前を名乗っていませんでしたね。私の名はカイト・トウサカです」

ヒイロ「俺はヒイロ・ユイ」

ラクス「私はラクス・クラインです」

ラミアス「私はこの艦の、艦長のマリユール・ラミアス大尉です」

ナタル「副長のナタル・バジルール中尉だ」

ムウ「俺はムウ・ラ・フラガ大尉だ。じゃあ行くぞ」

カイト「はい」

手早く自己紹介をすませ、俺達は部屋に向かった

ナタル「いいんですかラミアス艦長。あのような連中を信用して？」

ラミアス「今は戦力が必要よ。それに、彼等は怒らせなければ大丈夫よ。バジール中尉、くれぐれも彼等を怒らせないように注意してください」

ナタル「了解しました」

ナタルさんは、そう言つと部屋を後にした

ムウ「此所が、お嬢ちゃんの部屋で隣がお前達の部屋だ」

現在、鷹に案内され俺達は部屋の前にいる

ムウ「それからカイトとヒロ、お前等二人はちょっと検査を受けてもらうからな」

カイト「分かりました」

ヒロ「分かった」

まあ、口で違うと言っても確信はないからそれが妥当だな

その後俺とヒロは医務室に行き、採血をした。結果は勿論俺達はナチュラルだった

ムウ「すまなかったな疑って」

検査が終わった後、鷹が俺達に謝ってきた

カイト「いえ、疑いがはれて何よりですよ」

ヒロ「別に気にしていない」

ムウ「そうか。ならいいんだが」

別にアンタに謝られても、俺は何とも思っていないがな

その後鷹は、ブリッジに向かって行ったので俺達は部屋に向かい歩いていると

？「嫌よ！」

食堂のほうから声が聞こえたので、向かってみると其所にはキラとその友人達がいた

カイト「どうかしましたか？」

とりあえず中に入ってそう言ってみると

フレイ「な何で、コーディネーターがいるのよ！」

赤い髪の女がそう言う。確かフレイ・アルスターだったか？

カイト「失礼ですが、私とヒイロはコーディネーターではありません

んよ」

フレイ「嘘よ！アンタ達もコーディネーターに決まってる！」

？「フレイ、そんなこと言わなくたって」

もう一人の女の子がフレイを止めている。ミリアリアだったか？

ヒロ「信じられないなら、この艦にいるフラガという男か医務室の奴に聞け。聞けば俺達がコーディネーターではないと証明してくれる筈だ」

フレイ「う分かったわよ」

フレイは悔しそうな顔をしながらヒロに言う

カイト「ああ、ついですから言いますが、私達もこの艦に暫く乗ることになりましたから」

全員「え！」

キラ「そう何ですか？」

全員が驚いている中でキラが聞いてきた

カイト「はい。私達がこの艦から降りるまで暫く宜しく」

キラに左手を差し出す

キラ「あ！はい宜しくお願いします」

キラも右手を出し俺とキラは握手をした

その後は全員軽い自己紹介をして食堂に座っていた

カイト「で、さっきは何を騒いでいたんです？」

騒いでいた理由は知っているがミリアリアに聞く

ミリアリア「それが、カイトさん達の食事をフレイが持って行きたくないと、言ったから何です」

俺は聞いた後フレイを見ると

フレイ「そそれは貴方達がコーディネーターだと思ったから・・・」

顔を下にしながら言っている為、一応悪いとは思っているのか？

そして

ラクス「あのすいません」

原作通り歌姫が食堂にやってきた

さてどうなるかな？期待しながら俺は見物することにした

クルーとの会話（後書き）

次回も多少会話をしてから戦闘をします。

では次回も宜しくお願いします。

会話そして戦闘（前書き）

更新遅れてすいません

ではござ

会話そして戦闘

フレイ「ちょちよっと、何で此所にコーディネーターの子がいるのよ！」

喧しいな。高々歌姫が来たくらいで

ラクス「実は、喉が乾いてしましまして何か飲み物を頂けませんか？」

フレイの言葉を気にせず歌姫は近付く。天然は怖いな

フレイ「やだ！近寄らないでよ！ザフトのコーディネーター！」

ラクス「わたくしはザフトではありません。ザフトは軍の名称で、正式には・・・」

フレイ「なっなんだって一緒よ！コーディネーターなんだから！」

ラクス「一緒ではありませんわ。確かにわたくしはコーディネーターですが、軍の人間ではありませんもの」

歌姫はまだ近寄ろうとする

フレイ「コーディネーターが、馴れ馴れしく私に喋ったり近寄ろうとしないで！」

全く、ただ見物しているだけでいようと思ったのに、こんなに喧しいと何か言いたくなってしまうな

キラ「・・・」

あらら、キラはかなり今の発言でへこんでるようだな

カイト「はいはい。2人共とりあえず其処までですよ」

2人の間に、手を叩きながら入る

フレイ& amp・ラクス「カイトさん」

ヒロ「・・・全く一々五月蠅い奴だ」

ヒロも、呆れながら立ち上がる

フレイ「何よアンタ！コーディネーターの方を持つ気！？」

フレイがヒロに突っ掛かるが

ヒロ「お前と話しても時間の無駄だ。・・・カイト、俺は格納庫に行っているぞ」

カイト「ああ了解」

ヒロはそう言うと、フレイを全く相手にせず格納庫に向かって行った

フレイ「何よアイツ、コーディネーターの味方する何て」

全くコーディネーター コーディネーター五月蠅い。て言っかっざくなってきた

カイト「五月蠅い黙れよ」

フレイを睨みながら素で言う

フレイ「なっ何よ!？」

カイト「さっきからコーディネーター　コーディネーター五月蠅いんだよ。このブルーコスモスが」

フレイ「わ私は、あんな過激な奴等じゃない!」

カイト「何が違う?コーディネーターだからって理由で、毛嫌いして話も聞かないで拒絶して敵と決め付けてる今のお前と、ブルーコスモス一体何が違うのか俺に教えてみるよ!？」

イライラする。下らんことで素が出ちゃうし

フレイ「そそれは・・・」

言い返せないよな。俺の言ってることの大半は、今のコイツに当てはまってんだから

カイト「それにお前は、助けてくれた友達に平気で酷いこと言えるんだな」

俺はキラを見ながら言う

フレイ「わっ私は別にキラに言った訳じゃ・・・」

言葉の意味などを、理解せず言っているのかコイツは？

カイト「キラもコーディネーター何だから、お前はキラに言っただけな
つもりでも、当然キラは傷つくだろ。それとも実は分かかって言
ってたりするのか？」

フレイ「・・・！」

フレイは何処かに行ってしまった

サイ「フレイ！」

サイがフレイを追って行った

カイト「言い返せなくなったら逃げるか。全く子供だな。ああいう
奴がいるから、人種差別何かで戦争がおこるんだよ」

ミリアリア「あっあの、何もあそこまで言わなくても」

呆れていると、ミリアリアが何か言ってきた

カイト「別に、ギアアギア五月蠅いから黙らせただけですよ」

口調を敬語に戻し話す

キラ「カイトさん僕のことなら別に・・・」

カイト「別に、ただ五月蠅いから黙らせただけだ。ラクスさん部屋まで送りますよ」

ラクス「はっはい」

キラ「あっ僕も行きます」

その後、歌姫とキラと一緒に食堂を後にした

カイト「ラクスさん、あまり出歩かないでください。面倒ですから」

ラクス「すいません。迷惑を掛けてしまいました」

カイト「分かったなら、いいですけど」

キラ「あの、カイトさん」

キラが俺を呼ぶ

カイト「何だい？」

キラ「どうして、口調を変えるんですか？」

ラクス「私も気になっていました。何故何です？」

面倒だな理由話すの、まあいいか

カイト「別に理由何てない。と言うか、敬語使うの面倒だから普通の口調で話す」

キラ「それが、本来の口調何ですか？」

カイト「ああそうだ」

ラクス「やっと、気になっていた違和感が解りましたわ」

違和感？口調のことなのか？

カイト「違和感とは？」

ラクス「いつも、カイトさんは私達と話している時に違和感を感じていました。違和感の正体は口調がいつもと違うと解ったからです」

普通に話していたつもりだったが、やはり慣れない敬語では違和感があったようだな

カイト「まあ、もうお前等相手に敬語は使わないつもりだからいいけど」

ラクス「話し難いからですか？」

カイト「ああ、さて部屋に着きましたよ」

他愛ない、会話をしたら部屋に着いた

ラクス「ありがとうございます。カイトさんにキラ様」

歌姫はそう言い一礼する

カイト「別に礼何ていいよ」

キラ「いえ」

ラクス「貴方も優しい方なのですね」

歌姫がキラを見て言う

キラ「そんなことはありません。僕も貴方と同じ、コーディネーターですから」

カイト「お前は、ラクスが同じコーディネーターだから優しく接してんのか？」

キラ「そついう訳じゃ・・・」

はつきりしない奴だな

ラクス「貴方が私に優しく接するのは、貴方が優しいからではないのですか？」

キラ「僕は・・・」

全くはつきりしない奴だな。イライラする

カイト「お前は、ラクスにもちゃんと友達と同じように接してんだから、お前は優しい奴何じゃないのか？」

キラ「カイトさんが、そう言うならそうなのかもしれません」

カイト「阿呆、そうなのかもしれませんがなくてそう何だよ」

キラのおでこに軽くデコピンを言う

キラ「痛！はい」

キラが笑いながら返事をした瞬間警報が鳴った

カイト「敵か」

キラ「行きましょう。カイトさん」

カイト「ああ、ラクスは部屋にいる。決して外に出るなよ」

ラクス「分かりました。お二人共気を付けて」

カイト「ああ、行くぞキラ」

キラ「はい！」

俺達は格納庫に向かい走り出した

？「其所の兄さん」

格納庫に入ると男が話し掛けてきた。確かマードックさんだったな

カイト「何です？」

マードック「アンタ等の機体と、カタパルトは連動してねえから自分で頼むぜ」

カイト「了解した」

マスラオに乗り起動する

ヒロ「Wガンダム発進する！」

ヒロが一足速く発進したようだ

カイト「マスラオ出る！」

また俺は、漆黒の宇宙に向かい出撃した

カイト「敵は・・・まあアスラン達かな」

予想していると、しつこい赤服達がやってきた

ラミアス「カイト君 ヒイロ君 キラ君 本艦を守りながら敵機を撃破して」

3人「了解」

俺達は4機に向かって行く

イザーク「どういうことだ！何故あの2機が足つきと共にいる！？」

イザークが怒鳴る

アスラン「あの不明艦と、残りの3機がないところを見ると、はぐれたか一時的に手を組んだのだろう」

アスランは、的確に分析しながら答える

ディアッカ「どっちにしろ、全機いなくて助かったぜ。あの5機とストライク、それと足つきを相手にする何て絶対無理だからな」

ディアッカが少し安心しながら言う

ニコル「しかし、あの2機だけでも十分脅威ですよ」

ニコルが2機を見ながら言う

アスラン「ああ。それにストライクもいるんだ。油断するなよ」

イザーク「分かっている！」

ディアッカ「援軍が来るまで、何とかもちこたえないとな」

ニコル「そうですね。頑張りましょう」

アスラン「俺はストライクを叩く。ニコル達は、残りの2機と足つきを頼む」

アスランが3人に命令する

イザーク「俺は、あの羽つきを落とす！」

イザークは、Wガンダムに向かっていき

ディアツカ「じゃあ、俺はあの黒いのを」

ディアツカは、マスラオに向かい

ニコル「じゃあ、僕は足つきを」

ニコルは、アークエンジェルに向かい進む

アスラン「キラ、今度こそお前を連れ戻す」

アスランも、ストライクに向かい戦闘を開始する

ヒロVSイザーク

イザーク「羽つき！」

デュエルが、サーベルを抜き接近する

ヒロ「また、お前か」

Wも、サーベルを抜きサーベル戦を始める

イザーク「羽つき！今度こそ落とす！」

ヒロ「しつこい奴だ。そうまでして俺を討ちたいか？」

デュエルのサーベルを、回避しWが片腕を斬り裂く

イザーク「まだまだ！」

デュエルは、残った片方の腕でサーベルを抜き攻撃する

ヒロ「ちっ！」

Wは回避したが、片腕を若干掠めた

ヒロ「少しは、やるようになったんだが！」

Wは、デュエルを蹴り飛ばしライフルで片足を破壊する

イザーク「足ぐらい！」

デュエルもライフルを撃つが

Wはシールドを投げライフルを防ぎ

ヒロ「其所だ！」

バスターライフルを発射し、シールドを破壊しそのままデュエルの
もう片腕を破壊し

ヒロ「武装を破壊する」

ライフルでシヴァを破壊した

イザーク「チィ！撤退する」

デュエルは戦闘続行不可となり撤退

カイトVSディアッカ

ディアッカ「格闘戦主体なら」

カイト「ちっ！」

バスターは、マスラオに接近させまいと、一定の距離を保ちながら戦闘している

カイト「こんなに、離れられたらマスラオじゃきついな」

接近しようとするが、バスターの砲撃に邪魔され中々接近出来ない

ディアッカ「このまま、落とさせてもらっぜ！」

カイト「しょうがない、機体損傷覚悟で突撃するか」

マスラオはバスターに接近する

ディアッカ「させるか！こいつを喰らいな」

バスターは、ライフルを連結させ散弾を撃つが

カイト「フアング！」

マスラオは、フアングを連結させ盾を造り散弾を防ぐ

ディアツカ「なっ！馬鹿な」

カイト「この距離なら！」

マスラオは斬影を抜き急接近する

ディアツカ「くそ！」

バスターはミサイルを、マスラオに乱射するがマスラオは全てミサイルを斬り破壊し

カイト「もらった！」

サーベルで、ライフルを破壊し蹴り飛ばし、ライフルで右肩と左肩を破壊する

ディアッカ「またかよ！くそ撤退する」

バスターも戦闘不能となり撤退

カイト「アークエンジェルを守れ」

マスラオはファングを10個射出した

アークエンジェルVSニコル

ニコル「この！」

ラミアス「回避！」

アークエンジェルは、ブリッツの攻撃を受けていた

まだ致命的な、ダメージはないがこのままではまずい

ニコル「これで！」

ブリッツが、ランサーダートを発射しようとした時

ピピピッ

ニコル「何！」

機体アラームが鳴り、前方と上下左右からマスラオから射出されたファングが、ビームを放ちながら向かってきた

ニコル「何だ！？」

ブリッツは回避しながら、ライフルでファングを破壊しようとするが、ファングが速い為当たらず逆にファングの攻撃で片足が破壊された

ニコル「く！速くて当たらない！」

破壊しようとするが、左右から突撃してきたファングが右腕に突き刺さり爆発した

ニコル「なっ！撤退します！」

ファングに敗北しブリッツは撤退した

カイト「さて、ブリッツも退いたから後はイージスカ？」

イージスは現在原作通りストライクと戦闘中（原作通りなので戦闘シーンはカットします）

フレイ「パパをパパを助けて！」

カイト「うん？」

いきなり通信が入ってきた

ラミアス「カイト君にヒロ君、接近してる友軍艦を大至急援護して！」

カイト&ヒロ「了解」

友軍艦は、攻撃されながら此方に向かってきた

フレイ「お願いパパをパパを助けて！」

カイト「チィ！」

ヒロ「く！」

援護に向かおうとした矢先、大量のジンが俺とヒロの行く手に現れた

カイト&・ヒロ「邪魔だ！」

バスターライフルとファングでジンを撃破し進む

まさか、このタイミングでフレイの親父が来るなど！

向かっている間にも、艦二隻がジンに落とされ

ヒロ「く！」

カイト「間に合え！」

キラ「やめろっ！」

俺達は叫びながら最後の艦に向かうが

クルーゼ「ハハハ、さようならだ」

クルーゼは、無惨にも最後の艦を撃ち落とした

フレイ「イヤー！」

原作通り、フレイのお父さんは殺されてしまった

カイト「ちっ！助けられなかった」

俺はそう言い、シグーを睨むと同時にナタルさんが、全機に原作通り歌姫を人質に撤退しろという通信を送った

その後も、原作通りザフトは撤退し俺達はアークエンジェルに帰還

した

キラ「保護した人を、人質にするってそれが連合のやり方ですか！」

キラが、鷹に詰め寄り怒鳴っている

ムウ「そうしないと、助からないほど今の俺達はピンチ何だよ」

鷹も、悔しそうな顔でキラにそう言う

カイト「だからと言って、流石にあんなこと2回目はないですよね？」

鷹に聞いてみる

ムウ「それは・・・」

何だよ。まだ実はやるかもしれないのか？

ヒロ「これ以上、あのようなことをするのなら俺達は抜ける」

ヒイロが鷹を見ながらそう言う

ムウ「分かってる。もうあんなことやらせねえよ。お前達を敵に回すようなことはな」

一応分かってはいるようだな。まあ今度やったら、ヒイロの言う通り俺も抜けるがな

そして

フレイ「アンタ達！」

フレイが、物凄い顔で俺達の前に来た

フレイ「何で？何でパパを助けてくれなかったの！」

ヒイロ「最善は尽くした。だが俺達の力不足だった」

キラ「じめんフレイ」

フレイ「アンタ達、自分が戦えるからってちゃんと戦ってないでしょ！」

馬鹿だ。コイツは完全な馬鹿だ

カイト「君は、やっぱり言葉を選べないんだな」

フレイ「アンタに、そんなこと言える資格があるの！？パパを見殺しにしたアンタが！」

コイツ完全に俺を嘗めてるようだな

カイト「確かにそんな資格はない。だが、必死で助けようとした俺達に、そんな言葉はないだろう？確かに俺達は君のお父さんを助けられなかった。だがだからって、艦にいただけで戦いも知らない君に、そんなこと言われる筋合いはない」

フレイ「何よ！アンタ何かに私の何が分かるのよ！」

カイト「知らないな、自分勝手な奴のこと何てよ。逆に君は、人の気持ちを分かっているのか？」

フレイ「そそれは・・・」

都合が悪くなると、黙り込む。餓鬼が

カイト「自分勝手に、人の気持ちも理解してない餓鬼が、ギヤアギヤア喚くんじゃねえよ。・・・行くぞヒイロにキラ」

ヒイロ「ああ」

キラ「はっはい」

俺はそう言った後ヒイロとキラと一緒に部屋に戻った

会話そして戦闘（後書き）

次回はオリキャラが出ます

では次回も宜しくお願いします

運び屋ヘルメス（前書き）

更新遅れて申し訳ありません

リアルで色々あり過ぎまして

では駄文ですが宜しくお願いします

運び屋ヘルメス

部屋に戻り、俺とヒロとキラは無言で部屋にいる

カイト「キラ、大丈夫か？」

そんな重い空気の中、俺が口を開いた

キラ「・・・はい」

大丈夫とは言っているが大丈夫じゃねえな

カイト「あまり、フレイの言ったことは気にするなよ。一々気にしてたら、身が持たないからな」

アイツの言葉を、全部真に受けてたら疲れちまうからな

キラ「・・・はい」

やっぱり元気ねえな。まあ当然か

ヒイロ「キラ・ヤマト」

キラ「・・・何？」

ヒイロ「戦場で余計なことを考えるな。死ぬことになるぞ」

ほう。やはりエンドレスワルツ時のヒイロだけのことはある。やはりキラのことを、心配しているようだ

キラ「・・・ありがとうヒイロ。覚えておくよ」

キラがヒイロを見て、そう言った瞬間再び警報が鳴った

カイト「ザフトか？だがさっきの戦闘から考えると、幾ら何でも早すぎるな」

ヒイロ「別の部隊の、可能性があるな」

キラ「別の部隊？」

勘弁してくれよ。こっちはさっきまで戦闘してたんだからよ

警報が鳴り止み、ラミアス艦長から通信が入った

ラミアス「三人共、本艦に未確認の機体が接近して来ているの。各自機体に搭乗してください。場合によっては戦闘もあり得ます」

ラミアス艦長は、そう言うのと通信を切った

カイト「だそうだ。行くぞヒロ キラ」

ヒロ&キラ「了解」

俺達は格納庫に向かった

格納庫に向かい俺達はそれぞれ自機に搭乗し

カイト「マスラオ出る」

キラ「キラ・ヤマト ガンダム行きます！」

ヒロ「Wガンダム発進する」

また漆黒の宇宙に向かい出撃した

カイト「さて、何が来るかな？」

原作では、このタイミングで部隊が来た記憶はない。なら新たな敵か？

考えていると、機体がコンテナを引っ張りながら一機、こちらに向かってきた

カイト「なっ何！」

俺は、その機体を見た時驚いた。理由は、その機体がこの世界には存在しない筈の、ウェイブライダー形態のZガンダムだったからだ

更に、ブースターからはGN粒子が放出されている

ヒロ「カイト、あの機体のパイロットはお前と同じ存在か？」

ヒイロが、Zを見て通信を入れてきた

カイト「ああ、恐らくそうだろう。あの機体と動力は、この世界には存在しないからな」

俺達の機体の前に、Zは接近し止まると通信を入れてきた

？「此方は、運び屋ヘルメスのエイジ・サエガミだ。ドウエイン・ハルバートン少将の依頼で補給物資を届けに来た。着艦許可を願う」

エイジ・サエガミだと？一体誰だ？その前に運び屋ヘルメスって何だよ！

ラミアス「ハルバートン少将から！・・・分かりました。着艦を許可します」

おいおい、そんな簡単に許可するなよ。罠だったらどうするんだよ？

そんな風に思っていると、俺達にも通信が入り艦内に戻った

艦内に戻り、機体から降りると丁度Zからもパイロットが降りてきた

？「着艦許可をいただき、ありがとうございます」

灰色のパイロットスーツを着た奴が、ヘルメットを取り俺達を見る

エイジ「運び屋ヘルメスの、エイジ・サエガミです。宜しく」

エイジと名乗った青年が、ラミアス艦長に片手を出す

ラミアス「アークエンジェル艦長のマリュー・ラミアスです」

ラミアス艦長も、片手を出し二人は握手をした

ナタル「……」

一方の副長は、エイジをずっと睨んでいる

エイジ「では、この書類にサインを」

エイジは書類を出しラミアス艦長に渡す

ラミアス「何の書類？」

エイジ「荷物受け取りの、サインですよ」

ラミアス「分かりました」

ラミアス艦長は、納得したのか書類にサインをする

エイジ「それでは、私はこれで」

ムウ「ちょっと待った」

エイジ「何か？」

鷹がヘルメットを被ったエイジを止める

ムウ「前から、気になってたんだよ。運び屋ヘルメスの目的って何なんだ？」

？運び屋ヘルメスを、アークエンジェルのクルーは知っているのか？

エイジ「目的など、運搬に決まっているでしょ。私は運び屋何ですか」

ムウ「たかが運搬の為に、ナチュラルとコーディネーターの両方を、敵にするとは思えなくてな」

エイジ「運び屋は、運ぶのが仕事です。下らない差別などして客を選ぶようなやり方は私はしたくない。それが理由ですよ」

この男の目には、一瞬の迷いもない。本気のような。鷹もそれが分かったのか黙り込んだ

エイジ「では私はこれで」

カイト「待て」

この男に一番用があるのは俺だ

エイジ「今度は貴方ですか？一体何です？」

カイト「ちよつと話があるんだ。俺の部屋まで少し来てもらえないか？」

俺は、こいつが何者なのか確かめなければならない

エイジ「すいませんが、まだ貴方と話す訳にはいきません」

やはり断るか。まあこの答えは予想通りだな

カイト「そうか。なら次会った時に、俺の質問に答えてくれないか？」

yesの確率は代々五分ぐらいか？まあそれぐらいの確率なら十分だな

エイジ「分かりました。次に会った時に」

まさかのyes。まあこれで退屈な原作の中で新たな目的が出来たな

エイジ「では、私はこれで」

エイジはそう言うと、Zに乗り何処かに行ったようだ

その後、俺とヒロとキラはまた俺の部屋に戻った

カイト「キラ、運び屋ヘルメスとは何なんだ？」

まずは情報、奴のやっていることをキラに聞いてみた

キラ「運び屋ヘルメスは、ナチュラルとコーディネーターの、どちらの依頼も受け指示された場所に荷物を運ぶ運び屋です」

名前の通りの、運び屋のようだな。だが何で運搬何てやっているんだ？

中立を保ってまで、運搬何かする意味があるのか？

まあいいか。奴が仕掛けてこないなら

ヒロ「運搬が目的。何か、裏があるかもしれないな」

キラ「やっぱりヒロもそう思う？僕も少し怪しいと思ってるんだ」

カイト「まあ、情報ありがとなキラ」

キラ「いえ。じゃあ僕は用があるんでこれで失礼します」

カイト「ああ、分かった」

キラはそう言つと部屋を出て行つた

ヒロ「あの運び屋をどう思う？」

カイト「裏があるように思えるが、暫くは様子を見よう。下手に仕掛けて敵にされても困るからな」

ヒロ「それが、今の最善の策だな」

カイト「ああ、さてヒロちょっと一緒に来てくれないか？」

ヒロ「構わないが、何をする気だ？」

カイト「ちょっと、歌姫に用があつてな」

ヒロ「そうか。出来るだけ隠密にな」

カイト「分かっているさ」

そう言った後、俺とヒロはラクスの部屋に向かった

運び屋ヘルメス（後書き）

次回の更新は出来るだけ早くやります

では次回も宜しくお願いします

歌姫返却（前書き）

更新がかなり遅れてすいませんでした。

今回は題名の通りです。

では宜しくお願いします。

歌姫返却

カイト「ラクス、ちょっと話があるんだが」

歌姫の部屋に、俺とヒロは向かいノックするが誰も出ない

ちょっと、タイミングが遅かったようだな

カイト「はあ、格納庫に向かうか。行くぞヒロ」

ヒロ「ああ」

歌姫の部屋を後にし、俺達は格納庫に向かった

案の定キラと歌姫が格納庫にいた

ヒロ「何をしている？」

ヒロが、キラを見て詰め寄る

キラ「ヒロ、僕はこの子をザフトへ返そうと思うんだ。もうあんな人質何かにさせない為に」

ヒロ「・・・そうか、なら早くしろ。俺も手伝う」

キラ「え!？」

キラは、ヒロの発言に驚いている。自分を止めるんじゃない手伝うと言ったことに

カイト「俺も手伝ってやるよ」

後から、俺もキラの元へ行く

キラ「カイトさん。・・・でも僕のせいでお二人に迷惑をかける訳には」

カイト「別に、俺とヒロはクルーじゃねえし。何かやってもどうにかなるだろ」

実際は、どうにもならないだろうがまあ何とかなるだろう

だが気になるのは、何故かキラの友達が来ていないことだな

ラクス「すいません。皆さん私の為に」

カイト「これ以上、利用させたくないからな」

ラクス「本当に、申し訳ありません」

歌姫が、何回も俺達に頭を下げる

カイト「とりあえず準備は完了した。・・・行くぞ」

ヒロ「ああ」

キラ「分かりました」

俺達三人は、アークエンジェルから発進した

カイト「何故こうなった？」

ラクス「何がですか？」

何故だ。何故ストライクに乗る筈の歌姫がマスラオに乗っているんだ！

あれか、俺がアスランに会って歌姫返せとお願いしたいのか

何て災難。何という不幸！

などと、嘆いている間に目標地点に到着した

カイト「後は、イージスが来るまで待つだけか」

ちなみに、ヒロとキラは離れて俺達の様子を見ている為近くにはいない

ラクス「カイトさんは、何故戦うのですか？」

待っている間、歌姫が俺に聞いてきた

カイト「理由何て特にない。俺は命が続くまで、少しでも多く犠牲

者を救いたいと思っているだけだ」

それが、この世界にいられる為の条件だしな

ラクス「貴方は、本当に優しい方なのですね」

カイト「ラクスは、ザフトに戻ってどうするんだ？」

答えは、知っているが聞いてみる

ラクス「私なりに、戦ってみますわ。平和の為に」

強い信念を、常に持っているようだな

カイト「俺も、俺なりに頑張ってみるよ。平和の為にな」

本当は、他世界にいられる為だが

ピピピ

レーダーに反応有り。どうやら、イージスが来たようだ

アスラン「約束通り、一人で来た」

カイト「コックピットを開けて、顔を見せろ」

そう通信で言うと、アスランがコックピットから出て来た

カイト「よし、ラクス準備はいいよな？」

ラクス「はい」

俺も、コックピットを開けてラクスと一緒に出る

カイト「本人だと言う、証拠がいるよな？ラクス何か喋ってくれ」

ラクス「分かりましたわ。アスランお久しぶりですね」

カイト「これで、本人と信じてくれるか？」

アスラン「ああ、いいだろう」

カイト「それじゃ、またいつかなラクス」

ラクス「はい。カイトさんもお気をつけて」

ラクスは、そう言いアスランの元へ向かった

俺は、コックピットに戻ろうとしたが

アスラン「何故、それほどの機体と腕を持ちながら、ナチュラルに味方する？」

アスランが、俺に聞いてきた

カイト「味方する？ふつ、では聞くがお前の敵とは何だ？」

アスラン「決まっているだろ。ナチュラルだ！」

カイト「ほう。なら戦争もせず、ただ平和に暮らしてるナチュラルも全員殺す気か？」

アスラン「なっ！それは・・・」

カイト「罪のない人間を、ただナチュラルという理由だけで殺すのか？下らない奴等だ。其処までして自分達は優れていると言いたいのか？」

アスラン「ナチュラルが、何を言う！お前達が、核を射たなければこんなことにはならなかった！」

核を射たなければねえ

カイト「なら逆に、お前達がナチュラルに攻撃をしてナチュラルが、同じことを言ったらお前はどうする？」

アスラン「それは・・・」

カイト「自分達が、被害者みたいなこと言ってるじゃねえよ。核を射たれたから、同じ痛みを与える。そして、何時しかどちらかが滅びるまで、戦争をして結果は大切な物・人を失い後悔する。本当に大切なことは、双方分かり合って未来を築くことじゃないのか？」

アスラン「ナチュラルと、分かり合っただと？話も聞かないで、核を射った奴等とそんなことは」

カイト「出来ないと、言いたいのか？ならお前達は、停戦する為に来たナチュラルに、そう言っただけ拒絶するのか？」

アスラン「・・・」

カイト「まあ、俺はお前等馬鹿共が何を言おうがどうでもいいがな。本当の敵が分からず、全てが手遅れで終わって、後悔でもすればいい」

俺は、そう言っただけマスラオに乗り込む

アスラン「待て！本当の敵とはどういうことだ！」

カイト「自分で見つける。そして考える。お前等が、やってることが正しいのかどうかもな」

俺はそう言い、ヒイロ達の元へ向かった

ヒイロ「終わったか？」

カイト「ああ、無事にな」

ヒロ達の、元へ戻り現在は帰還中

キラ「アスラン・・・」

キラは、浮かない顔をしているようだな

カイト「キラ、どんなに悩もうがお前はアイツの敵という事実是不変わらない。ヒロも言ったが、迷っていたら自分が殺られる」

キラ「分かっています。でも・・・」

まだ、覚悟は出来ないか。でもやはり、普通は簡単に覚悟何か出来ないよな

カイト「はあ、戦いたくないならお前の想いをアイツに言え」

キラ「想い？」

カイト「そうだ。もしそれでも、アイツは戦うことを選ぶなら、その時は覚悟を決めろ」

キラ「想い・・・はい。やってみます」

覚悟出来たかどうか分かんが、まあこれで少しは楽になるだろう

ヒロ「キラ、アークエンジェルに戻ったらお前は俺とカイトに、脅されて奴を返したと言え」

キラ「え!？」

カイト「俺とヒロは、アークエンジェルに戻らず、そのまま艦に戻る」

キラ「そんな!?!どうして!?!」

そりゃ、歌姫勝手に返して堂々と帰る訳にはいかんだろ

カイト「ラクスを返して、更に俺達と一緒に戻ったら、確実に俺達の誰かが疑われる。なら俺達が戻らず、お前は俺達に脅されてやったと言えば、全て悪いのは俺達になりお前に罪は無くなる」

キラ「でも、それじゃ・・・」

ヒロ「気にするな。分かったな？」

キラ「・・・分かりました」

ほう、もう少し何か言うと思ったが意外だな

ピピピ

アークエンジェルを補足、さてと

カイト「じゃあキラ、また会おう」

ヒロ「死ぬなよ」

キラ「はい。二人も気をつけて」

キラに通信を送った後、クォーターに戻ろうとしたが

ナタル「待て！貴様等、自分が何をしたか分かっているのか！」

アーケエンジェルから通信、五月蠅いな

カイト「歌姫を、返しただけです？」

ナタル「貴様！自分が、どうなるか分かっているのか！？」

カイト「さあね」

ラミアス「とりあえず、まずはアーケエンジェルに帰還して」

やっぱり、帰還しろと言うか。まあしないがな

ヒロ「悪いが、帰還はしない。俺達は自身の艦に戻る」

ナタル「何！？」

カイト「言った通りの意味ですよ。俺達は、アーケエンジェルに戻

らない。今まで世話になりました。後キラ・ヤマトは、騒がれると面倒だったので連れて行っただけです。今回は、俺とヒイロの独断による行動ですので」

ラミアス「待つてカイ・・」

通信を切る。もう言うことは無いからな

カイト「ヒイロ行くぞ」

ヒイロ「ああ」

俺達はそのまま、反転しクォーターに向かった

また何処かで会おう。大天使

歌姫返却（後書き）

もう少し早く更新出来るよう頑張りたいと思います。

では次回も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2422o/>

他世界への介入者

2011年10月11日18時57分発行